大川山の哺乳類・鳥類

コウモリ類の役割

香川県では13種の在来の哺乳類が生息しており、その多数となる5種が香川県域で生息している。その中でもコウモリ類は、県内で計9種が記録され、その内の3種のコウモリが、この地域で確認されている。コウモリ類は主に夜間活動し、飛翔中の小さな昆虫を捕食するなど、この役割を担うコウモリ類は、食物連鎖の中で生態系のバランスを保つ上で重要な存在であると見なされている。エサとなる昆虫の中には、農業害虫となる蛾類が多く含まれることから、人間にとって有難い存在と言える。

森林性のコウモリ類の本来の日中の休息場は洞窟や樹洞であるが、県内のコウモリ類は、ため池の導水路トンネルや家屋の屋根裏などの人工的な環境も上手く利用して生活している。県内でコウモリ類が確認されている人工洞は4箇所有り、その内の3箇所が大川山と同じまんのう町に在る。コウモリ類に対する理解は年々深まりつつあり、2001年に土地改良法が改正された際に、土地改良事業の実施に際して環境との調和に配慮することが原則化されてからは、コウモリに配慮した導水路トンネル改修が全国的に行われるようになってきた。

テングコウモリ
頭胴長：59～73㎜
日本固有種
標高100m程度から1,400m周辺までの森林に生息する。大川山の山頂付近で確認されている。

森の恵みに守られる鳥類

香川県では約300種の鳥類が記録されており、その内の85種（約28%）が大川山で記録されている。[illegible]

オオアカゲラ
全長：約28㎝　分布：旧北区

キバシリ
全長：約14㎝　分布：旧北区

大川山の昆虫

大川山では、讃岐山脈の高所に局地的に見られる昆虫類が生息している。中には大川山の固有種や県下ではここでしか見られない希少な種も生息し、山の本来の姿が残る、昆虫にとっても暮らしやすい場所である。

森林で暮らすアリ

アリは昆虫の中でも役割を分担した社会集団を営むため個体数が多く、地球上には少なくとも2京匹ものアリが生息するという研究報告があり、その存在は大きい。また、世界のアリの総重量は炭素換算すると1200万トンに達し、全世界の哺乳類と鳥類の重量を超えるとも推定されている。自然界においてアリは土中に巣穴をつくるため土壌の通気をよくしたり、他の生物の捕食や死骸の処理、植物のタネを運び植生を豊かにするなど、生態系の中で大切な役割を担っている。そんなアリにも生息に偏りがあり、実は人間が手を加えた身近な環境では生息が少なく、森林ではその環境ごとに多くの様々なアリが生息している（表1を参照）。注目すべき点は、樹上性のアリは生活空間となる幹・枝の枯死部や樹洞を生じやすい古木ほど営巣率が高くなる傾向にあることだ。哺乳類や鳥類、陸貝の中にも樹洞を必要とする種が生息しており（大川山の哺乳類・鳥類、大川山の陸貝を参照）、改めて古木の存在の重要性が理解できる。また、森林で実った木の実の殻や、森林で育まれた陸貝の死貝の殻は、特定のアリを育む巣となり、どこまでも命の連鎖が続いていく。

【表1】香川県における、森林性のアリ類の空間利用例

	営巣環境	事例	具体的な環境など
①樹上性	生木	オオアリ類、シリアゲアリ類、トゲアリ、ヒラフシアリ	樹洞の中・生木の枯死部・着生植物・樹皮下・割れ目
	枯木（立ち枯れ）	コヌカアリ など	
②林床性	生木の根元	ケアリ類	
	倒木や朽ち木	ウメマツアリ	
	土の中	カギバラアリ類、アシナガアリ類、トフシアリ、ノコギリハリアリ、ハヤシクロヤマアリ	（3タイプに分かれる）・林内の種・林縁の種・両方に生息する種
	陸貝の死貝の中	（体サイズが小型で働きアリ数も少ない種）クロコアリ類、ヒメハリアリ類	
	木の実の殻の中	ニセハリアリ類、カドフシアリ など	
③	決まっていない	アミメアリ	・巣が移動する

モリシタクサアリ（ケアリ類）
分布：日本（本州、四国、九州）
大きさ：約4㎜
香川県では2か所しか記録がなく、現時点で生息が確認されているのは、大川山の山頂下の林縁部のみ。女王アリは別種のアリの巣に侵入して乗っ取り、働きアリを奴隷として自身の子どもを育てさせる一時的社会寄生を行う種である。

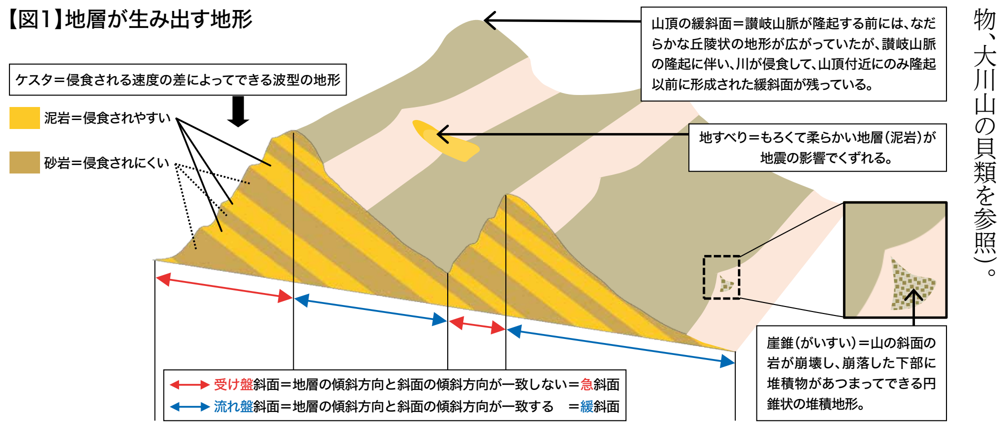
大川山の なりたち

大川山は、太古の海に降り積もった砂や泥が、地殻変動で地下深くに埋もれて固まり地層（和泉層群）となった後、再び地殻変動で隆起してできた讃岐山脈の一部だ。そして、一続きだった讃岐山脈を長い時間をかけて削り取り、現在の大川山と竜王山に仕立てた川が、古吉野川・現土器川である（写真1を参照）。このように生まれた山は様々な地形を作り出し、多様な生物を育んできた。つまり地殻変動は、私達に恩恵を与えてくれる生物多様性を生み出す原動力なのだ。

地層の傾きが生み出す、地形と生物の多様性

大川山を含む讃岐山脈を構成する地層（和泉層群）は、もともとは海底に堆積していた砂や泥だ。つまり、本来は水平な地層となるはずだった。しかし、この地層は地下深くに埋もれていた際、地殻変動で東西から横圧力がかかり、大きく曲げられた。そのため、大川山の地層は水平ではなく傾いている。この地層の傾きは侵食される速度の差で生じる段差を生み出し、その結果、地形に変化をもたらした（図1を参照）。そして、そこに生息・生育する動植物の多様性も生み出していった（大川山の植物、大川山の陸貝を参照）。

【図1】地層が生み出す地形



【写真1】土器川の谷

【写真2】中寺廃寺跡の展望台から見た景色

中寺廃寺跡からの展望はなぜ絶景なのか？

大川山には西尾根の標高600から700mの山深い山中に讃岐平野や瀬戸内海を一望できる中寺廃寺跡（山岳の大寺院跡）がある。歴史的価値から国の史跡に指定され、ネット上では中・四国屈指のパワースポットとしても紹介されている。この場所は、図1で示した"流れ盤斜面"（地層の傾斜方向と斜面の傾斜方向が一致する斜面）で、構造線もしくは讃岐山脈北縁の活断層地震によって、もろくて柔らかい地層（泥岩）がくずれて地すべりが起きた場所でもある。このことにより、緩やかな傾斜地を生み出し、一方、その北側には、隆起した讃岐山脈北側の断層崖が形成されたことで、県内の絶景と言われる場所が生まれ、現在、展望台が設置され訪れる人々を魅了している。しかし、地形図も航空写真もない時代にどのように、この緩斜面を見つけ出し、中寺を建立したのだろうか？

ご挨拶

香川の自然と生物多様性ガイドマップでは、県内各地について理解を深めていただけるよう作成しております。大川山は県内に二つある標高1000mを超える山として、大滝大川県立自然公園に指定され、県内でも開発を免れた森が多く残る貴重な場所です。この自然環境の中、様々な生態系ごとに生き物が生息し、多様な生態系を作り出しています。

本冊子では、山中で見られる生き物をとりまとめてマップに加え、山の見どころ・魅力を様々な分野から伝えていきます。また、生物多様性についても関心を持っていただくため、地形・地質のなりたちや生き物の現状、森との関係なども紹介しています。

さあ、ガイドマップを片手に、香川の自然の中に出かけ、自然や生き物を観察し、五感で自然のしくみを感じてみましょう！

参考文献一覧

[illegible]

写真提供者／協力者

秋山 敬典／伊藤 文紀／今川義康／川崎 克美／佐藤 明／末広 喜代一／高家 和彦／高木 眞人／長尾 星孝／長谷川 修一／濱口 正幹／林 鈴以／福丸 政一／松本 慶一／安森 盟文／矢野 重文／和田 洋介／／岡田 有里加／金子 之史／久米 修／篠原 望／高八 稔弘／多田 昭／松村 敦／谷地森 秀二／横山 昌太郎／まんのう町地域振興課

大川山新聞

創刊号

2023年（令和5年）3月22日

発行
香川県
〒760-8570
高松市番町四丁目1番10号
Tel 087-831-1111（代表）

企画・編集
NPO法人 みんなでつくる自然史博物館・香川
〒766-0202
仲多度郡まんのう町中通838
ことなみ未来館3F
Tel 070-4073-0989

賛助
公益財団法人 松平公益会
〒760-0030
高松市玉藻町4番10号

香川の自然ガイドマップ8 大川山の自然と生物多様性

自然観察のマナー

● **自然を知るには、まず五感から!**
動植物をよく知るには、顔を近づけて見るだけではなく、手で触れ、においをかいでみるなど、五感を使って観察してみましょう。

● **自然の中で耳を澄ませてみよう!**
野鳥の声や虫の音、風の音や川のせせらぎなど、自然のすばらしい音に耳を澄ませましょう。
音楽を流したり、ラジオを聴いたりしながら歩かないようにしましょう。

● **山火事に注意しましょう!**
雨の少ない瀬戸内の森は一年中乾燥しています。森の中での火気は厳禁です。タバコは決められた喫煙場所以外では吸わないようにしましょう。

これには注意しよう

● **危険な生き物には近づかないように!**
スズメバチやマムシなど危険な生き物には注意しましょう。見かけたら驚かさないように、ゆっくりとその場を離れましょう。
また、森の中には、ウルシの木やハゼノキなど触ると肌がかぶれる木があるので注意しましょう。

● **イノシシに出合ったら! 襲われないための3原則**
一つ　何もせず放っておく（無視をする）と、ほとんどの場合、向こうから逃げていきます。
二つ　ゆっくりと後ろに下がって、静かにその場を立ち去るか、物陰に隠れましょう。
三つ　決して威嚇したり、追い払ったりしないでください。絶対にエサは与えないようにしましょう。イノシシが人を襲うようになります。

● **自然の中に入るときの七つ道具!**
長そで・長ズボン、足元がしっかりした靴、帽子、軍手、水筒、雨具、健康保険証

● **疲れたら休もう、予定を変えよう!**
のんびり、ゆったり歩くことが自然観察の基本です。特に、夏は熱中症に気をつけましょう。
カミナリが聞こえてきたり、急に天候が悪くなりそうな場合には、無理は禁物です。早めに避難しましょう。

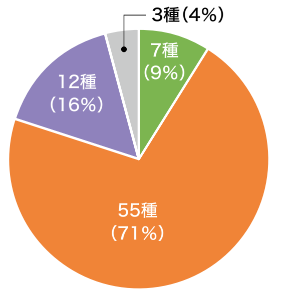
大川山 の陸貝

香川県では140種のカタツムリの仲間（以下、陸貝という）が記録されており、新たに追加調査（2023年）を行った大川山では77種（55%）が確認されている。なお、大川山山麓の沢や、そこから繋がる用水路や水田などの淡水域には7種（17%）の淡水産の貝類も生息している。

【表1】大川山における生息場所と陸貝

山頂部に生息する種	■ヤマキサゴ　■シコクゴマガイ　■トサゴマガイ　■トサギセル　■コンボウギセル　■カサネシタラ　■アワクリイロベッコウ
山麓部に生息する種	■ゴマオカタニシ　■ヤノムシオイガイ　■コウベマイマイ　■オオケマイマイ

【図1】大川山における陸貝の生息環境と生息種数



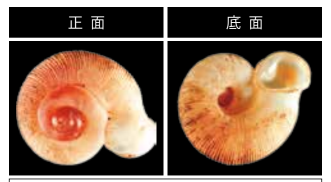
陸貝を育む多様な自然

山の散策中に陸貝を目にしたことがあるだろうか。陸貝はほとんどの種が森林で暮らし湿気を好む。香川県は森林率が全都道府県中37番目と低く、さらに乾燥した地域であるため、陸貝にとって棲みにくい地域だ。それでも大川山は低地に比べて降雨も多く、森林も発達しているため陸貝の種類が多様である。陸貝は種によって生息条件（湿度・日当たり・森林の状態など）が異なり、山頂部と山麓部で見られる種は変化する（表1を参照）。森林内では、大半の71%の種は林床に落ち葉が積もってできた腐食層に生息し、それに次ぐ16%の種は森林のガレ場で暮らしている（図1を参照）。ガレ場とは、風化・落石した岩や石が斜面に積もってできた環境で、陸貝にとって積み重なった石の隙間が乾燥や敵から身を護るのに適している一方、非常に不安定な場所でもあるため、自然環境の変化や人為的な改変を受けやすい。この厳しい環境のため、ガレ場に生息する陸貝の絶滅危惧種の割合は、林床の約27%に対し、50%と高く、危機にさらされていることがよく分かる。大川山のガレ場は、自然林の発達した受け盤斜面の崖錐（大川山のなりたちを参照）の裾に多く形成され、そこをすみかとする貴重な陸貝を育んできた。

香川県の固有種 ヤノムシオイガイの危機

今、大川山で最も絶滅寸前の状態に追い込まれている陸貝は、ガレ場に生息する県固有種ヤノムシオイガイだ。現時点で、生きた個体が確認できている場所は、世界で大川山のごく限られたガレ場のみという極めて厳しい状況にある。かつて、大川山以外にも2箇所の生息地があったことや、大川山における詳細な調査結果などから、もともとは讃岐山脈の標高250から450mの山麓の谷間に広く分布していたと推定されているが、環境変化によって衰退していく過程で生息地が分断されたと考えられている。というのも、ヤノムシオイガイの生息状況を調査する際、慎重にガレ場の石をめくったり、石の位置を少しずらすだけでも悪影響が出るなど、環境変化に非常に弱いことが判明したからだ。そのため、既存の生息地ではヤノムシオイガイの保全を目的とした調査をすることさえ難航している。

【ヤノムシオイガイ(左)とその生息環境(右)】



分布：日本（香川県まんのう町）
殻長：約1.7mm、殻幅：約3.5mm
緩斜面の地表に落ち葉が堆積した湿気のあるガレ場に生息する。大川山のガレ場にのみ生き残っている。

ガレ場を調査する、矢野重文氏（ヤノムシオイガイの発見者）。環境を傷つけないよう、這いつくばって慎重に調査。

森と陸貝は語る

大川山には、現在に至るまで80年以上再発見されていない陸貝が2種あり、この山では絶滅したと考えられている。それは、オオギセルとナラビヒダギセルであり、どちらも古木に依存する種だ。古木の根元付近は落ち葉が吹き溜まり、日照がさえぎられて湿度もあるため、陸貝には暮らしやすい。古木には洞が出来やすく、ここも陸貝の良い生活空間となる。樹皮には陸貝のエサとなる地衣類が生え、木が枯れて土に還るまでは、朽ち木に陸貝のエサとなるキノコが生える。私たちは古木を天然記念物に指定したりしているが、古木の価値は今日だけのものでなく、むしろ自然界ではそこに至るまでの過程と枯死後にも大きな価値がある。絶え間なく大木が存在し、自然に寿命を迎え、次世代がきちんと育つ…、このような森林環境が生息に必要であることを、陸貝たちが訴えている。

オオギセル
分布：日本（東京都以西～中国地方東部、四国）
殻長：最大で50mm、殻幅：10mm
日本最大のキセルガイ。巨木の倒木に生息する。
大川山では1940年の記録のみ。

ナラビヒダギセル
分布：日本（本州（中部から近畿地方、中国地方）四国）
殻長：約15mm、殻幅：約3.8mm
半樹上性のキセルガイ。巨木の樹幹と根元に生息する。
大川山では1940年の記録のみ。

大川山 の植物

大川山を含む琴南地域では、香川県全体の約40%に相当する少なくとも983種の維管束植物（シダ植物と種子植物）が確認されている。その内、絶滅のおそれのある種が133種含まれ、植物多様性の保全上重要な地域となっている。

【大川山における標高とシダ植物の関係】

標高		イノデ属	オシダ属
高い	山上	■ツヤナシイノデが多い	標高が800m以上になると、■ミヤマクマワラビ が現れる
	山腹	イノデ の割合が少なくなり↷ 寒さに強い ツヤナシイノデ に代わってくる / ■イノデモドキ、サイゴクイノデ が増える↺	オクマワラビ に加えて ■クマワラビが増える↺
低い	山麓	■イノデ が多い	■オクマワラビ が多い

【大川山にある環境と、そこで見られるシダ植物の例】

	乾燥した林縁	湿った林縁	林内	湿った林内
夏緑性	■ワラビ ■トラノオシダ ※ ■カニクサ（つる性）	■ヤワラシダ ※ ■ハシゴシダ ※ ■ゼンマイ ※	■キヨタキシダ ■ハクモウイノデ ■ミヤマクマワラビ	■シケチシダ ■ミゾシダ ■オオバノハチジョウシダ
常緑性	■ウラジロ、コシダ ■ベニシダ ■ミツデウラボシ ※ ■オオイタチシダ ※	■ホラシノブ（冬季に紅葉する株もある）※ ■アオホラゴケ（渓流沿い岩盤）	■イノデの仲間 ■オクマワラビ ■クマワラビ	■ヤマイタチシダ ※ ■コウヤコケシノブ（岩盤） ■ノキシノブ（岩盤・樹木）
冬緑性	■フユノハナワラビ		■オオハナワラビ	

※印は主に斜面に生育

キヨタキシダ

アオホラゴケ

ホンシャクナゲ

ナツツバキ

キクガラクサ

ウスバヒョウタンボク

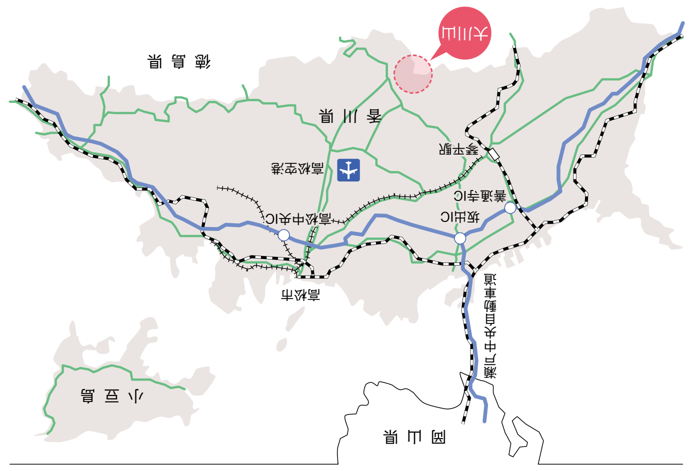
シダ植物から見た、生育環境の多様性

琴南地域では香川県で記録されているシダ植物の約70%が生育している。シダ植物は湿気を好む種が多いことから、香川県内でこの地域は土中や空中の湿度が高い環境にあると言える。乾燥した瀬戸内式気候の香川県の中で、このような環境にある最大の要因は、讃岐山脈最高峰の竜王山と次峰の大川山の影響で、低地に比べて降雨が多いことである。さらに、これら標高1000m級の山々の間の稜線は、琴南地域のいくつもの谷を南から囲むように位置し、日射による乾燥を防いでいる。それでも、四国の他県と比べると、シダ植物にとっては湿度が十分ではないようだ。例えば、琴南地域に生育しているナガバノイタチシダやヘラシダ、ヌリトラノオ、シシランは四国の他県では森林内でよく見かける種類であるが、県内では生育地も株数も限定されあまり見かけない。特にヌリトラノオとシシランにいたっては県内の生育地は琴南地域のみで株数もわずかである。シダ植物の生育箇所や生育状態は、それぞれの谷の中にある地形条件（斜面の向きや勾配）と気象条件（日射量・温度・湿度・気流）の相互作用で生じる環境によって違いが生じる。具体的には、同じ斜面の中でも、林縁、林内、崖地、沢筋によってシダの種類や生育状態が異なる。細かく見ると、斜面の立地条件（沢筋からの距離）や位置条件（最上部・中央部・最下部）、地質条件（岩盤層・風化土）によってもシダの種類や優占種が入れ替わっていく。大川山の地層が生み出した変化に富んだ斜面は、様々な微気象環境を生み出し、シダ植物の多様性を生み出している。

森林の重要性を考える

現在、香川県では462種の植物が絶滅危惧種に指定されている。その内の267種（57.8%）の指定要因が、森林開発（開発や岩石採掘等による森林の減少・変容）や、人工造林（スギ・ヒノキ林の造林による生育環境の変容）だ。これら、森林に生育する絶滅危惧種の内、ホンシャクナゲやナツツバキなど87種が大川山を含む讃岐山脈の山地に集中しており、この中には四国の他県では少ないが、讃岐山脈の山林ではよく見かけるキクガラクサやウスバヒョウタンボクといった讃岐山脈を特徴づける種も含まれる。さらに、絶滅危惧種以外にも特筆すべき希少植物（もともと株数が大変少ない種など）が琴南地域で50種確認されており、この内の82%が森林環境に依存している。それらは、林床や林縁に生育する種や樹木に着生する種など、樹木がまとまって生育している環境がなければ生きていけない植物が大半で、つまり、それらの植物は他の植物と共生している。見方を変えれば、希少種を支えているのは普通種であり、普通種が多く生育していることも大切な環境の一つなのだ。なお、シダ植物は自然林よりも沢筋の湿った環境を好むスギ林との相性が良い種が多く、よく手入れされたスギ林ほど種類が豊富で、群落を形成することが多い。つまり、植物の多様性を保全する上でも、造林地における適切な間伐の実施が必要なのである。

アクセスマップ



大川山の「登山口（中通バス停）」と「山頂」までの主な交通手段と所要時間

自動車をご利用の方	坂　出IC → 登山口 約50分 / 善通寺IC → 登山口 約50分 / 登山口 → 山　頂 約20分 / ●大川山山頂に無料駐車場あり（30台程度）
バスをご利用の方	バス：琴参バス美合線「琴平駅前バス停※」→「中通バス停」約30分 / ※JR土讃線「琴平駅」、ことでん琴平線「琴電琴平駅」の駅前 / 徒歩：中通バス停 → 山頂 約2時間30分 / ●大川山山頂行きの公共交通機関はありません。

■発　　行　香川県環境森林部みどり保全課
〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号
Tel 087-832-3227　Fax 087-806-0225
■企画・編集　NPO法人 みんなでつくる自然史博物館・香川
〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通838番地
琴南地域活性化センター（ことなみ未来館）内
Tel 070-4073-0989
■賛　　助　公益財団法人 松平公益会
〒760-0030 香川県高松市玉藻町4番10号

かがやくけん、かがわけん。 香川県 Kagawa Prefectural Government

令和5年3月22日 初版

大川山の昆虫とその他の節足動物類

大川山は讃岐山脈の高所に局地的に見られる昆虫類が生息している。中には大川山の固有種や県下ではここでしか見られない希少な種、かつて里山に広くいたが讃岐山脈でしか生き残っていない種も生息する。

オオクボカミキリ（冬 春 秋 夏）
体長約10㎜。香川県では大川山の山頂部でしか見つかっていない。自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。

ミヤマクワガタ（冬 春 秋 夏）
体長25～78㎜。香川県では讃岐山脈を中心地とした湿潤な内陸部に生息する。大川山ではサナギ類の樹液を吸うのが観察されている。

ミヤマカラスアゲハ（冬 春 秋 夏）
開長80～130㎜。香川県では讃岐山脈に広く生息し、低山や島しょ部では少ない。春に山頂部のツツジ類の花に集まり、夏は山麓の沢筋で給水する様子が観察できる。

チッチゼミ（冬 春 秋 夏）
体長約20㎜。香川県では讃岐山脈を中心地とした内陸部に生息する。写真のようにアカマツの細枝で吸汁し、林床のツツジ類の生枝に産卵する。小型種で、さらに鳴きながら移動するため、大変見つけにくい。

ダイセンサンオオコバネハネカクシ（冬 春 秋 夏）
体長約10㎜。世界で、大川山にしかいない昆虫。水の枯れない湿った沢の崖の石の下から見つかる。

オオミドリシジミ（冬 春 秋 夏）
開長:42㎜。1990年以前は里山のアベマキ、コナラ林に広く分布していたが、現在は低地から見られなくなり、讃岐山脈に局地的に生息している。

コケオニグモ（冬 春 秋 夏）
体長12～27㎜。ウメノキゴケなどの地衣類が着生した樹木の付近で見つかることが多い種で、大川山周辺の土器川の支流川沿いで生息が確認されている。夜行性で夜に巣をつくる。

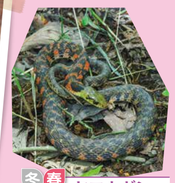
オオシモフリスズメ（冬 春 秋 夏）
開長:140～160㎜。農薬の影響の少ない里地・里山環境に生息し、大川山では山麓で見られる。日本最大のスズメガで、4月上旬頃に灯火に飛来する。

大川山の両生類・は虫類

琴南地域では絶滅種と外来種を除く県内全種となる14種の両生類が生息している。大半が山麓部の里山環境に生息するが、一部は渓流に生息する。琴南地域では9種のは虫類が記録されている。

トノサマガエル（冬 春 秋 夏）
体長60～90㎜。大川山の山麓の水田に生息する。水田の害虫を含む昆虫類、その他、クモやミミズ等を食べる。

イシヅチサンショウウオ（冬 春 秋 夏）
全長160㎜～200㎜。四国固有種。渓谷とその周辺に生息し、春になると水辺に集まり繁殖・産卵する。夜行性で、繁殖期以外は林床の落葉の下や腐植土の中で生活し、ミミズや昆虫、その他の土壌動物を捕食する。

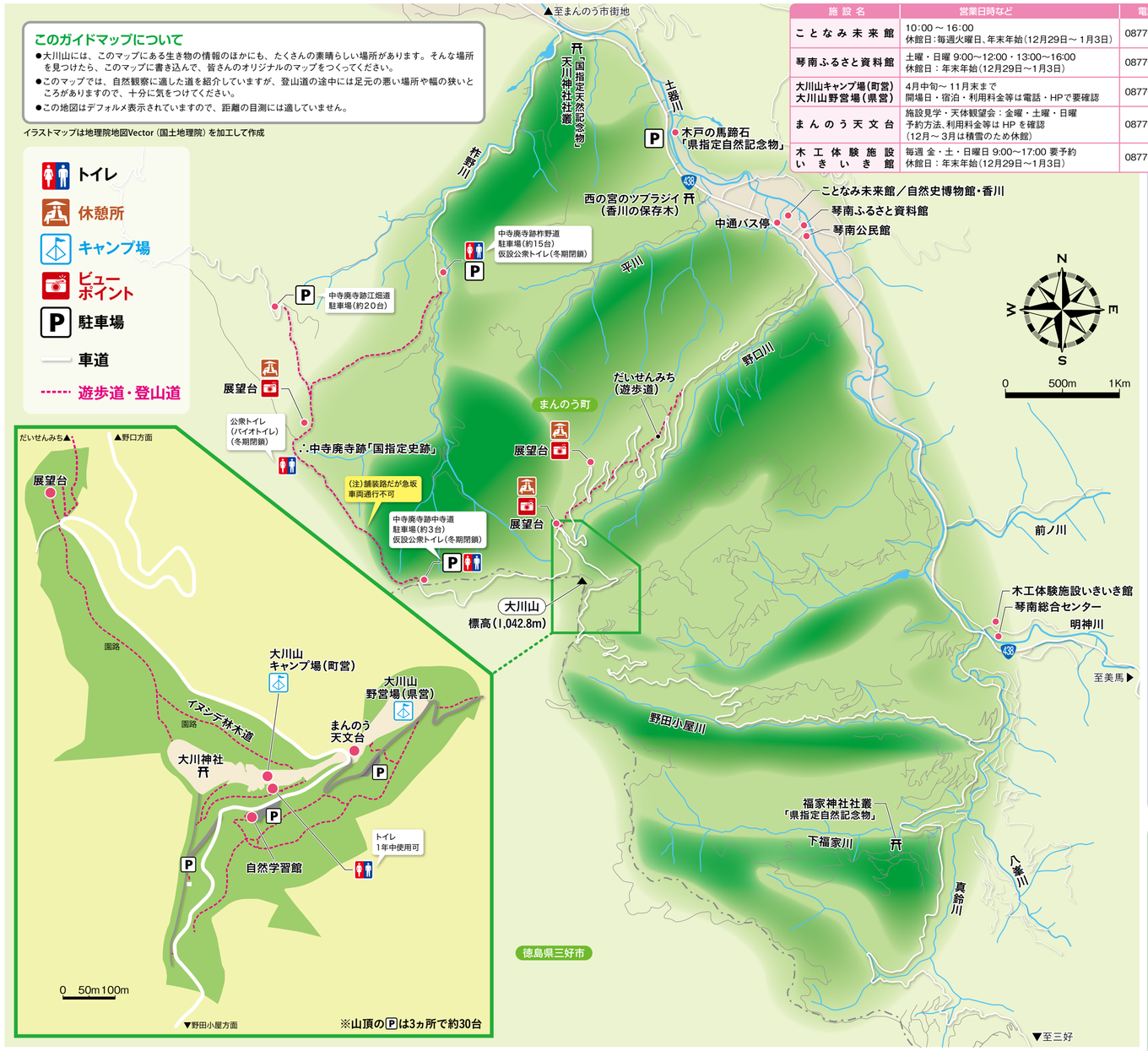


ヤマカガシ（冬 春 秋 夏）
全長60～120cm。低地から山地に広く分布し、水辺環境に多い。カエル類のほか、オタマジャクシやドジョウなどの小魚を捕食する。

このガイドマップについて

- 大川山には、このマップにある生き物の情報のほかにも、たくさんの素晴らしい場所があります。そんな場所を見つけたら、このマップに書き込んで、皆さんのオリジナルのマップをつくってください。
- このマップでは、自然観察に適した道を紹介していますが、登山道の途中には足元の悪い場所や幅の狭いところがありますので、十分に気をつけてください。
- この地図はデフォルメ表示されていますので、距離の目測には適していません。

イラストマップは地理院地図Vector（国土地理院）を加工して作成



施設名	営業日時など	電話番号
ことなみ未来館	10:00～16:00 休館日:毎週火曜日、年末年始（12月29日～1月3日）	0877-89-4626
琴南ふるさと資料館	土曜・日曜 9:00～12:00・13:00～16:00 休館日：年末年始（12月29日～1月3日）	0877-85-2221
大川山キャンプ場（町営）大川山野営場（県営）	4月中旬～11月末まで 開場日・宿泊・利用料金等は電話・HPで要確認	0877-84-2165
まんのう天文台	施設見学・天体観望会：金曜・土曜・日曜 予約方法、利用料金等はHPを確認（12月～3月は積雪のため休館）	0877-89-0619
木工体験施設いきいき館	毎週 金・土・日曜日 9:00～17:00 要予約 休館日：年末年始（12月29日～1月3日）	0877-84-2533

大川山の鳥類

香川県で記録される鳥類のうち、85種（約28%）が大川山で生息している。大川山は、鳥類の特に重要な繁殖地であり、観察地として人気が高い場所として知られている。

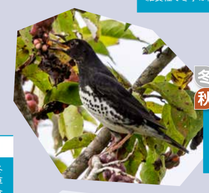
カッコウ（冬 春 秋 夏）
全長約35cm。大川山では5月下旬から6月上旬に尾根沿いの高木にとまり、「カッコウ・カッコウ」と鳴く。毛虫を好んで食べ、オオヨシキリ、ホオジロ、モズ等の巣に託卵する。

フクロウ（冬 春 秋 夏）
全長50～62cm。大川山では山麓で鳴き声が良く聞こえる。夜行性でネズミを中心とした小動物を襲って食べる。大きな樹洞に営巣する。

コシアカツバメ（冬 春 秋 夏）
全長17～20cm。4月下旬から5月上旬に渡来し、大川山山麓の家屋などに徳利状の巣を作る。飛翔する昆虫を食べる。

カヤクグリ（冬 春 秋 夏）
全長約14cm。大川山の山頂付近で低木を跳ぶように移動し餌を探す。雑食性で冬季は種子を主に食べる。

ハギマシコ（冬 春 秋 夏）
全長約16cm。越冬のため冬鳥として飛来する。草食性で、主に地上で種子を食べる。



クロツグミ（冬 春 秋 夏）
全長約22cm。普段は林の地面をはね歩きながら昆虫やミミズなどを捕食し、秋には写真のように大川山の山頂近くのコブシの果実をついばむ。

オオマシコ（冬 春 秋 夏）
全長約16cm。越冬のため冬鳥として飛来する。雑食性で、写真のように地上で種子や昆虫などの節足動物を食べる。

イスカ（冬 春 秋 夏）
全長17～18.5cm。冬に大川山に渡来し、樹木の種子や小さな昆虫を食べる。特にマツの種子を好み、左右互い違いになったくちばしを使って種子をついばむ。

ヒレンジャク（冬 春 秋 夏）
全長17～18cm。11月から5月にかけて滞在し、大川山の山頂付近で写真のようにヤドリギなどの果実類を食べる。

大川山の植物

大川山を含む琴南地域では、香川県全体の約40%に相当する少なくとも983種の維管束植物（シダ植物と種子植物）が確認されている。そのうち、絶滅のおそれのある種が133種含まれ、植物多様性の保全上重要な地域となっている。

ニシノヤマタイミンガサ（冬 春 秋 夏）
草丈60～90cmの多年草。大川山のイヌシデ林の林床で大群落を形成する代表的な草本類。この樹林の最大の特徴の一つで県下随一のものである。

ヤドリギ（冬 春 秋 夏）
樹高（直径）30～100cm。樹木の枝に丸く球のように付着する、常緑の半寄生植物。大川山の山頂部に多く見られる。

イヌシデ（冬 春 秋 夏）
樹高10～20mの落葉高木。コナラなどと共に雑木林や丘陵地で普通に見られる種だが、香川県では大川山の山頂でなぜか優占して生えている。

ヒナスミレ（冬 春 秋 夏）
草丈3～8cmの多年草。山地に生育し、平野部では見られない。大川山の山頂付近で多く見られる。

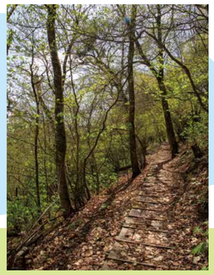
シコクママコナ（冬 春 秋 夏）
草丈20～50cm。山頂付近のイヌシデ林の林床に生育する多年草。四国の他県では少ないが、大川山では多く見られる。

トチノキ（冬 春 秋 夏）
樹高20～35mの落葉高木。香川県では非常に少ない植物で、イヌシデ林の斜面に生育している。

トチノキの実（冬 春 秋 夏）
大きさ3～4cm。山頂の北東側の道路で、落下した実が見つかる。

大川山の山頂

山頂は山頂効果で気温が低いうえ風も強いため、標高約1,000mであるにも関わらず、夏緑樹林が発達しやすい環境にある。そのため、山麓・山腹に分布していない冷涼な気候を好む生き物が見られ、その他に豊かな広葉樹林を必要とする生き物も生息・生育している（表面裏面の各動植物の記事を参照）。通常、このような環境ではミズナラ、ブナ林が発達するが、ここでは20mを越すイヌシデの大木がなぜか優占し、香川県内ではここだけの貴重な樹林となっている。上層・中層・下層・林床を構成する各種植物の種類も多様で、希少種が多く含まれ、香川県における最も貴重な植物群落の一つとなっている。特に南側の遊歩道は、植物ウォッチングに適している。



大川山の陸貝

大川山では76種が確認されている。大半の55種は林床に落ち葉が積もってできた腐食層に生息し、12種は森林のガレ場、6種は樹木（樹幹・樹洞・葉裏）、3種は人里環境（畑や庭）で暮らしている。

アワクリイロベッコウ（冬 春 秋 夏）
殻長4.5㎜、殻幅2.5㎜。香川県では讃岐山脈の標高の高い稜線付近に分布し、大川山では山頂付近の広葉樹林の林床に生息する。

トサギセル（冬 春 秋 夏）
殻長12㎜、殻幅2.5㎜。香川県では讃岐山脈に局所的に分布し、大川山では山頂付近の広葉樹の古木の樹幹に生息する。

シマケルギセル（冬 春 秋 夏）
殻長23㎜、殻幅5㎜。香川県では讃岐山脈に広く分布し、大川山では山頂から山麓の広葉樹林や針葉樹林のガレ場に生息する。

オオケマイマイ（冬 春 秋 夏）
殻長13㎜、殻幅25㎜。香川県では大川山以東の広葉樹林の落葉下に生息しており、大川山周辺地域では土器川沿いの、集落周辺の斜面に生息する。

大川山の哺乳類

香川県では23種の在来の哺乳類が生息するが、その多数となる15種（約65%）が琴南地域で生息している。また、コウモリ類が生息する環境も整っている。

テングコウモリ（冬 春 秋 夏）
頭胴長59～73㎜。日本固有種で標高100m程度から1,400m周辺までの森林に生息する。大川山では山頂付近の沢を飛翔していることが確認されている。

ニホンテン（冬 春 秋 夏）
頭胴長約45cm。海岸近くから標高1,800mくらいまでの森林に生息する。雑食性で、小鳥やネズミ類、昆虫や果実などを食べる。

ニホンザル（冬 春 秋 夏）
頭胴長47～60cm。日本固有種で海岸近くから標高1,500m周辺までの森林や里山に生息する。雑食性で、果実、種子、葉、芽、昆虫などを食べる。